参考書誌研究・第45号（1995・10）

華夷秩序と日本
――18世紀～19世紀の東アジア海域世界――

濱　下　武　志

本稿は，平成５年12月１日（水）に国立国会図書館新館研修室において，午後２時より４時にわたって行われた，平成５年度企画展示会「世界の中のニッポン」の講演会の内容である。講演を活字化するにあたり，内容に沿って多少の加筆・修正を行った。

はじめに

御紹介いただいた濱下です。今日私が取り上げようと思っていますテーマは，「華夷秩序と日本」というものですが，先程「世界の中のニッポン」の展示を見まして，これは非常に大きなテーマであり，またテーマへのアプローチが非常に多岐にわたっていて，実際の本や史料・地図等を見ていますと，そこから多くの研究のアイデアも導かれるような感じがしました。国立国会図書館自身が大変貴重なコレクションを所蔵していますし，そこにまた他の資料も加わって，大変充実した展示になっていると思いました。

本日は資料や本を専門にしておられる皆様方に，文字や書物のことよりも，むしろ空間の歴史という視点で，日本を取り巻く「海」，あるいは「海域」についての問題を少しお話ししてみたいと思います。

これまで「海」については，歴史的にいくつか研究のタイプがありました。初期には「隔てられた海」というイメージで，特に日本の鎖国が議論される時には，外と隔てるという視点からの研究がありました。これは歴史研究の問題からみますと，日本・中国あるいはヨーロッパなどそれぞれの国の歴史が中心であって，国と国とは対外交渉史あるいは交流史・交易史という形で結びつけられるという研究スタイルが長い間続いていましたので，特に鎖国研究で「隔てられた海」という考え方が強くみられたと思います。

しかしその後，「海」は「繋ぐ海」であるという観点から「海のシルクロード」とい

う視点からの議論が出てきました。「海」は決して隔てるのではなく，繋ぐという役割をするということで，たとえば「海のシルクロード」における陶器の伝播，中国陶器あるいは日本の古伊万里・伊万里といった陶磁器がヨーロッパにどう伝播するのかという関心から，この「繋ぐ海」研究が行われてきました。

私は，その後の過去5年から10年くらいの間の研究の特徴について特に注目していますが，この時期の研究は，これまでの鎖国研究に対して，その閉鎖性を再検討するというテーマもあります。そこでは，「東アジアの中の日本」あるいは「東アジアの中の中国」という形で，国を越え，かつ国を包み込む広い地域，東アジアという地域の中で日本・中国を位置づける海域研究，あるいは海域の周辺をめぐる研究という視野を拡げたわけです。したがって，それは鎖国の再検討ということにもなりましたし，広域地域の研究のテーマとしては，朝貢秩序というテーマにもなりました。またこれまでのアジアとヨーロッパの関係を，アジア内部の関係の中で考えてみることにもなったと思います。この鎖国あるいは朝貢秩序の再検討，すなわち東アジアの中国を中心とした国際秩序をどう考えるかという問題へ，今までの東西関係重視観から何故切り替えられたかといいますと，一言でいえば周縁研究という観点が強くなったからだと思います。具体的には，それは長崎の研究であり，琉球の研究であり，対馬の研究であり，従来周縁と考えられていた地域の研究がこの間に本格的に蓄積されてきたからであると思います。そして，さらに江戸時代像の再検討というテーマが加わって，この周縁研究の成果がこれまでの近世末期および近代への移行期についての再検討を強く促したと思います。

1. 東アジアの海域

まず，「海域」の問題についてお話します。〈資料1〉のアジアの海域圏の図をごらんください。この図は，ユーラシア大陸の東側および東南部のいわゆる東アジア・東南アジアと呼ばれているところです。この地域は，地球上の他のどの大陸の周縁部よりも，非常に入り組んだ複雑な形をしていることがわかります。

つまり半島部と島嶼部とに囲まれた「海」，すなわちインド洋・太平洋などのオーシャン（Ocean）という大規模な海域ではなく，日本海・黄海などシー（Sea）と呼ばれる海域が重なり合っており，それがユーラシア大陸の東側からオーストラリアにかけて続いているところに特徴があります。この海域以外に，地中海なども入り組んだ形を持っていますが，その他の大陸の海辺部では，ほとんどが非常に平坦な形をしていると思います。ヨーロッパの北部は，一部には東アジアのような所がありますが，それほど南北に拡がっているというわけではありません。

この東アジアの海は，北からオホーツク海，日本海，黄海，東シナ海，そしてフィリピンの方向にスール一海(蘇禄海)，それからインドネシアの方向にジャワ海へと続き，他方，モルッカ海を経てアラフラ海，コラル海，タスマン海という形で，ちょうど緩やかなS字型の海の帯が作られている事がわかります。さらにこれらの海域が重

なり合い，その接点や交差点に中継港とか交易港ができているわけです。それはさらにベンガル湾，インド洋へと接続し，西に向けてつながっていきます。

つまり歴史的には，マカオ，広州あるいはマラッカなどが海域の交差点として交易を中継していたことがわかります。江戸末期より，オーストラリア近海から日本海に捕鯨船が北上しており，海の帯を伝って南北・東西の交易が行われていました。それは「海の道」という形で点と線とを結ぶように見えますが，実は，海域という空間の広がりを前提として，その海域の範囲の周縁部に交易港・交易都市が出来上がるという形になっていると思います。したがって，たとえば長崎も，上海・寧波などとのつながりにおいて非常に活気をおびていたわけで，その意味では長崎は東シナ海という海域の周辺に位置しているのであって，日本の周辺に位置しているという見方は海に向って開かれている長崎を十分には伝えていません。

こういう海域の連鎖が，様々に東アジアから東南アジア一帯の歴史的な動きの背景をなしていた事がわかります。具体的に中国と日本との関係をみますと，両者は海域によって隔てられながらも，相互に影響を与え合う距離にありますが，完全にかつ一方的に影響を受けるほど接近しているのではなく，ある一定の距離を保っているわけです。したがって日本は，選択的に中国から様々なものを選び採ったわけで，このような歴史も，背景的には海域という一つの空間が持つ歴史関係から考えることができるわけです。そして，このような中から次の課題としては，海域がどのような秩序によって成り立っていたのかを，朝貢関係や周縁地域を研究することによって考えていくことになります。

最近の研究では，対馬の「宗家文書」や長崎の華僑関係史料，琉球の『歴代宝案』などの史料群の研究によって具体的な海域をめぐる諸関係が明らかにされ，今まで江戸や東京からみて周辺と思われていたところがむしろ入口でありかつ中継地であって，海域との接点に位置したことによって，ある地点の歴史的役割が浮上していたことがわかります。

これらの関係の概念図を〈資料2〉に載せましたが，交易のネットワークがいかに多角的に拡がっていたかがわかると思います。

2. 朝貢・冊封体制

朝貢・冊封体制の歴史について，琉球を例にとって考えてみることにします。琉球と中国は19世紀の半ばに至るまで朝貢・冊封関係を結んできました。その中で琉球は明代中期まで東南アジアで中国への朝貢品を調達した時期があります。具体的には胡椒と蘇木です。このような東南アジアにしか産しないものを，琉球が中国に琉球からの朝貢品として送っていたわけです。

また琉球は朝鮮国王に使節を派遣して，朝鮮との繋がりをもっていました。さらに琉球は，薩摩を通じて日本とも繋がっていたわけで，琉球が持っている交易ネットワークという中継機能によって中国と日本を結びつける，あるいは中国と東南アジアを

結びつけるという形で，琉球が明・清王朝と500年間に及ぶ朝貢・冊封関係の中で果たした役割は，非常に大きいと思います。こういう琉球の中継的な機能が交易の上から認められるわけで，「1」でお話ししたような海域の帯が，朝貢秩序によって統治，関係づけられていたということは，〈資料3〉の図に示されています。

先程来私は中国といっておりますが，中国という表現を「国」そのものとして考えることは非常に難しい面があります。歴史的には，非常に広域の地域を中国が統治していましたし，ある意味では帝国的な広がりを持ち，かつ徳治的な統治を行ってきたわけです。したがってそれを「国家」という形で考えるよりも，概念的に中華世界または華夷秩序として捉えることがより適切であると考えられます。そこでは，中央と地方という関係に始まり，皇帝を中心としてその威光が次第に外側に同心円的に拡がっていくという，いくつかの異なる統治の型を持ち，中央から離れるにしたがって，その統治は次第に緩やかな関係になっていきます。

「地方」の外側の「土司」・「土官」は，いわゆる少数民族の部族長を清朝政府の役人に任命して，彼らのリーダーシップを通して統治するという形で，土着の役人という主旨でこのような言い方をしています。

「藩部」はチベット・モンゴル地域で，これは一種の直轄地です。そしてその外側に朝貢国があるわけです。これには朝鮮・琉球・ビルマ・パレンバン（ジャワ）・スール一（蘇禄）・ヴェトナム（安南）・カンボジアなどがあり，これらが周囲に朝貢国として位置していたわけです。

さらにその外側には，互市国（互いに交流を行う，互いに商いを行うという意）があり，一応対等な関係とされていて，日本も明の中期からこの互市国の仲間入りをしました。日本はその後“鎖国”政策をとりましたが，実質的にはこの全体の華夷秩序の中で動いていたことに変わりはありませんでした。これは薩摩を介した琉球と日本の関係，あるいは対馬を介した朝鮮と日本の関係等をみれば，日本の外交政策，対外使節の受入方式などは，中国皇帝を中心とした全体の華夷秩序の中で機能していたことがわかります。したがって鎖国の理解も，これまでは閉鎖的に「閉じていた」という理解でありましたが，実際にはむしろ琉球を通じての日中の貿易，長崎とマカオの貿易，対馬・朝鮮半島を通じての対中国貿易などによって，選択的に「開いていた」といえます。つまり鎖国によってアジアあるいは中国から切り離されていたというよりも，実質的には華夷秩序の中に日本も参加していたわけです。日本は朝貢使節こそ送りませんでしたが，琉球や朝鮮への対応の方式を見ますと，往復文書や格式や位階制度の並行を遵守するなど，まさしく華夷秩序の中で機能していたといえます。したがって日本の鎖国の問題は，近世日本を貿易上・外交上・政治上から見て，東アジアの華夷秩序の中に位置付けることが大切であると思われます。

3．華夷秩序の中の位階制度

さて華夷秩序についてですが，これは「中華」という理念あるいはイデオロギーと

しての中華自尊という自己認識と，他者を「夷」として捉える華夷認識であると理解できます。さらに，華夷秩序には〈資料４〉にあるような品銜という位階制度（役職に付随した品格）があります。この品銜には一品から九品までの序列（表では七品まで示す）があり，権威の序列でもあるわけです。これらは中国の他に，日本・朝鮮・琉球・ヴェトナムにおいても使われていました。

この品銜の序列は，たとえば並行に琉球と朝鮮，日本と朝鮮の間などに，三品官なら三品官というように，それぞれの同列の品銜が相互に文書を並行に往復させあうことによって，華夷秩序内の並行関係や上下関係が確認されていたわけです。つまり華夷秩序は，ちょうどその横と縦に蜘蛛の巣を張りめぐらせたような形でお互いを認識し合っていたわけです。従って品銜が上下の場合には，上下関係の格式を持った文書のやりとりを行いますし，意見のやりとりもこの関係で行うことになります。

では実際に琉球を例としてとりあげてみたいと思います。〈資料４〉の下の部分を見ますと，官職位階が並行の形で，Ａ国の位階制の一品・二品・三品とＢ国の一品・二品・三品は，それぞれ並行関係でやりとりすることになります。しかし外交交渉などで，Ａ国がＢ国を一ランク下げて見ることになった時，この平行の関係は崩れるわけです。具体的にいえば，江戸時代末期の日本・琉球間，明治初期の日本・朝鮮間に発生した書契問題（外交文書形式の対立）がこれにあたるわけです。つまり当時の華夷秩序というのは，中華自尊という理念的な自者認識だけではなく，位階秩序の平行と上下関係が東アジア全体にはりめぐらされていることで相手を認識し，かつ自分自身をも位置づける形式になっていたからです。

さて琉球の例で〈資料４〉を紹介しているわけですが，琉球の場合，朝貢使節が中国へ行く時は三品官という身分になります。資料の琉球の側の上から三段目に正議大夫・耳目官という役職がありますが，この三品官の人が朝貢使節の代表としていくことになります。これは中国の地方官でいうと按察使に当ります。つまり，中国の地方官に対して朝貢使節は品銜で対等の関係で訪問するわけです。しかし琉球国王は中国皇帝から二品官として任命されています。従って琉球国王の二品官に相当するところを中国側でみていただきますと，総督・巡撫・布政使という地方官にあたり，福建将軍は二品官なので琉球国王と同格の文書のやりとりをおこなうことになります。

これらの関係を『歴代宝案』の中で示すと〈資料５〉のようになります。これら左側が文書自体で，右側が和田久徳先生が校訂本を編輯する際に整理された文書番号と内容です。ここで〈資料５〉によって内容をみてみますと，たとえば中国皇帝から文書が発せられる場合には，「諭」「勅諭」「祭文」「詔」といった形で上から下へ発する文書の格があります。琉球国王から中国皇帝への文書の場合は，「奏」「表」という形をとり，これは「頓首，謹んで表を奉る」という表現を用いて行います。この「表」の形式は，一般的に国王から皇帝への文書のやりとりに用いられる書式です。つまり朝貢関係では，国王から皇帝への上下関係の中で「表」「上奏」などといった文書形式を踏まえることが即ち朝貢関係を確認することになるわけです。

琉球からの朝貢使節は直接に北京に入るわけではなく，必ず福州（以前は泉州）か

ら入ることが義務づけられていました。福州へは，福建巡撫宛に朝貢使節派遣の文書を持参します。これら対等の関係ですから並行文になり，「咨」という文書形式の表現が必ずつくことになります。

中国以外とのやりとりの実際例としては，〈資料５の２〉にある「国王（尚巴志）よりシャム国にあてて，磁器・蘇木等の自由な貿易を要請する」という形式の並行文になります。この文書では，琉球国王がシャム国王宛に「咨」という並行文を送っているわけですが，この事は琉球国王がシャム国王に対して，華夷秩序の中で中国を介した位階制度の機能の中で平行文を送っているという認識の存在が前提になります。リストには載っていませんが，朝鮮国王に対しても琉球国王は「咨」という並行文の文書を送っています。

以上のような形式で，華夷秩序は位階制度の中に各朝貢国・各国王の統治が中国との間に繋がっていることだけでなく，朝貢国相互の間も繋がっているという形式になっています。そして，そこに加わる事によって，ヨーロッパもこの華夷秩序の中に位置付けられてきたわけです。

ヨーロッパ諸国が，東アジアに通用していた儀式の手順を踏むことによってアジア貿易をおこなった例をあげますと，ポルトガル・オランダは朝貢関係に参加し，ロシアは互市国として参加しています。こういった形式をとることによって，日本の周縁，中国の周縁という問題だけでなく，周縁はむしろ海域の周縁が相互につながって多角的なネットワークが作られる，そしてそれが華夷秩序の中で中国皇帝を中心とした位階制度のもとにむすばれているという関係になっていると思います。

日本の場合は，長崎貿易に唐船を迎えるのみで中国と直接の外交交渉はありませんでした。しかし中国側では，日本の九州の豪族が送った使節などを，日本からの朝貢使節という形で中国独自の処理をしていました。また日本と朝鮮の対等関係（朝鮮通信使）や，日本が琉球国を朝貢国と見做す関係もありました。こういった関係を考えていきますと，徳川幕府自身が華夷秩序の中で機能していた，あるいはそれを利用していたということがわかると思います。

今までみてきた周縁研究の問題は，現在的な問題の関心としては異文化間交易・異文化間交流（英語では Cross-cultural trade, cross-culture といっていますが）ということです。これまでは，貿易というと「物を造る・需要がある・市場に出回る・長距離で運搬される」ということが主たるテーマでした。しかしそれをさらに，文化圏という観点からとらえ直してみようという考えが出てきているわけです。すなわち，異なる交易圏相互が係わりあうところを，文化圏として考えてみようという研究です。従って海域研究の拡がりは，交易あるいは朝貢貿易の問題から，さらに文化的な問題へと議論が拡がろうとしています。そして文化交差という新しい視点で，今まで研究されてきた資料をみる必要がこれからいっそう大切になると思います。

4. 媽祖信仰圏

次に〈資料6〉を見てください。これは天后・天妃の絵図ですが，船が非常な難儀に陥っているところを救う場面が描かれています。左上の雲に乗った天后・天妃といわれる海の守り神（女神）が現われて救出した話です。右側の場合は，取り立てた税の米を糧船に積み込んで南京や北京に運んでいる時，海が荒れて座礁したために，天后・天妃を皆で呼び出し，助けてもらっている場面です。また左側の場合は，海が荒れて座礁した軍船をやはり天后・天妃が救っている場面です。

何故これらの話を出したのかといいますと，今の文化的な問題と関係するわけですが，天后・天妃といわれる女神はもともと民間の海神だったのです。ちょうど宋の時代に27歳で死んだ林家の林黙（960-987年）という女性がこの媽祖の原形で，彼女が生きている間に様々な海難を予言して漁船等が遭難から救われたという伝説をたくさん生み，後にそれが媽祖として顕彰されたものです。

1987年に福建省の甫田県の媽祖廟において媽祖の千年祭が行われ，福建からの移民が多い台湾からも大量の漁船が集まりました。この千年祭の時だけは，パスポートもビザも無しで，甫田県の媽祖廟において祭りが行われました。ところで媽祖は海の守り神ですから，各地どこにでもあるわけです。海域圏の周縁には必ず海の守り神があるわけですが，次第にこの民間の海神に対して官が介入を行っていきます。具体的には，この民間伝説の媽祖に爵位や品官を与えたわけです。天后・天妃という形で爵位を与えていわば格上げを行ったわけです。元朝の皇帝も，明の皇帝も，清の皇帝も，爵位を媽祖に対して与えました。そして朝貢船を守らせ，あるいは冊封船の使節を守らせるという形で，官が海の管理または海の権力として登場しようとする時，こういう媽祖のような民間の海神信仰を利用していくわけです。

別の見方から言いますと，このような官の権力行使をどのような形で追うことができるかといいますと，媽祖廟というものの存在でわかるわけです。たとえば，香港には媽祖廟が300くらいありますし，台湾には媽祖廟が400くらいあるわけです。また東南アジア全域にもあります。さて媽祖はもともと海の守り神でしたが，移民に従って四川省のような海とは関係のない所でも今は媽祖廟が存在しています。日本においても，北は下北半島から南は九州まで媽祖像が存在しています。これは媽祖廟としてではなく，船が遭難した時に奉納する木像という形での媽祖があるわけです。このように船が航海する所には媽祖廟が存在するわけですから，媽祖廟の点を結んでいきますと，媽祖信仰圏とでもいうような拡がりが日本から東南アジア一帯にあることがわかります。イスラム商人にも彼らの守り神があり，ヨーロッパにもそれぞれの海の守り神がありますが，媽祖信仰圏はその中で生業が営なまれ，それが実質的に朝貢圏・朝貢関係を結んでいた地域であり，物資のみならず人が移動する時にもこの圏が利用されていた文化圏であったことがわかります。

この「海域圏」の一体性は，漂流民という範疇で見た場合にも当てはまります。つ

まり，漁船が漂流した時には朝貢ルートを通って本国へ返還されることになっていたからです。朝貢船の場合，初めから船の数や人数が決められていますから，その他の船はなかなか参加できません。そこで漂流というカテゴリーを利用して貿易を行うことになります。つまり貿易を行おうとする船は，交易場所付近まで来ると，人為的に船を壊して「漂流」として密貿易船から漂流船へ形を変えてしまうわけです。そしてさらに，役人が到着する前に交易を終えてしまいます。例えば鹿児島県の坊津などには貿易品を隠しておいた倉庫が現在でも民家の二階に残されておりますし，船が潜んでいた場所もあります。

このようにみてきますと，朝貢というものは，国対国の関係よりも海を仲介した人や物の移動が基礎にあり，もしそこで問題が起きた時は朝貢というチャネルで問題が処理されたことがわかります。このような形で，朝貢秩序の持っている裾の拡がりは，民間の文化的な海の守り神である媽祖にまで及んでいることがわかります。したがってここでは「海域」というものを，今までよりもさらに重層的・多角的な形で考えることができるのではないかと思います。

5. 開港場の時代—アジアから日本への衝撃

今まで前近代の問題について言及してきましたが，ここでは近代の問題を取り上げてみたいと思います。これまで，近代という時代は，ヨーロッパが閉鎖的なアジアを強制的に開いた，という所謂ウエスタン・インパクト（Western impact）の考えに基づいておりました。日本については，開国から明治維新へという形でそれ以前とは明確に一線を画した議論がなされ，富国強兵，殖産興業，国家形成あるいはナショナリズムを強調しています。

さて今までお話しした華夷秩序の問題は，東アジアにおいて歴史的に自らを律してきた外交関係であり，貿易関係でありそして自らのアイデンティティでもあったわけですから，近代において，この華夷秩序が同じ表現をとらないとしても，連続した側面はなかったのだろうか，ということを考えてみたいと思います。そこで開港の問題をアジア域内関係の歴史の中で考え直してみたいと思います。

開港場の問題を考えるにあたって，〈資料７〉の東アジア開港場の地図を見てください。近代における国際関係は，国家を中心とした国家間関係として理解されていますが，江戸時代，明清時代を通して形成された活動圏は，清末になって中央の権力が弱まっていきますと，反比例的に沿海地域が活気づき，海域をめぐる開港場相互の関係が非常に密接になりました。私はこの時期を近代の始まりとして位置付けたく思っています。これは「ヨーロッパ対アジア」の関係から見た近代ではなく，ヨーロッパの衝撃も利用しながら「アジア対アジア」というアジア地域内の相互関係から，またその歴史的連続性の中から導き出された近代であると考えているわけです。

たとえばヨーロッパの商品がアジアに入ってくる時は，暗暗裡に私達はヨーロッパ商人がその商品をもたらすと考えがちですが，最近の研究では商業の担い手，貿易の

担い手と商品とは区別して議論できるようになりました。たとえば古田和子先生の御研究によりますと，日本に輸入された1860年代，'70年代のイギリス製の大衆綿布であるグレーシャーティングの90パーセントまでは，上海で中国商人が調達して神戸に輸出しています。つまりイギリス商人はイギリス商品を取り扱っていないわけです。また日本にもたらされた朝鮮半島の米に対して，上海商人は揚子江下流の米を朝鮮半島に輸出しています。ここには，かつての朝貢貿易を担った華僑あるいは華人商人が朝貢の規制が緩んだことによって，ヨーロッパとの交渉で開港された開港場を中心に活動を拡大する姿が見えてくるわけです。したがって日本が開港したあとに華僑あるいは華人商人の活動が非常に活発になってくるということは，色々な形で報告されていますが，中国沿岸経済のインパクトをむしろ日本商人が受けたということが注目されるわけです。中国・朝鮮が1880年代に貿易協定を結ぶという形で，朝貢関係のもとに貿易・条約関係を含むようになり交易が拡大されます。

歴史的に大きなテーマである近代を考える時に，前近代と近代を余り切断しないでむしろ連続している面から考えますと，この開港場時代に見られる商業活動，中国から日本への清国商人のインパクトは，まちがいなくそれ以前の朝貢貿易の中で活躍した中国沿岸の商人グループおよび朝貢国における華人商人が，活動を拡げたということになります。そして日本の工業化についても，このアジアからのインパクトという観点で考えることが出来ないだろうかという問題があります。たとえば，中国商人が中国華南市場を紹介し，日本の工業化を促すという形で，日本がイギリス製の機械で綿布を製造するようになると考えるアジア間交易に置き換えるという歴史文脈です。日本はまず開港後に商業化の道を選択しようとするわけですが，既に開港場の対外取引の多くは中国人商人で占められていたために，日本は商業化に失敗し，工業化という道を選択せざるを得なくなります。しかもその場合にも，中国商人はマーケット情報を提供するわけです。このようにして，日本の工業化はアジアからのインパクトによって動機づけられたというふうに見做されるわけです。すなわち明治日本は，西欧化すること自体が目的ではなく，それを手段としてアジアに再び参加することを試みようとしましたが，そこで政治的にも経済的にも中国問題に直面したと思われます。

6. おわりに

今まで私は，日本の前近代から近代へという転換を一つの連続性の視点で捉えようとし，しかも日本の工業化，殖産興業，富国強兵をアジア内部の相互の文脈で考え，特に工業化を中国商人からのインパクトであると考えてきました。最近，日本における中国商人が日本の綿工業投資などに関わっていることなど，これまでとは違った近代アジア像あるいは近代日本像が次第に議論されるようになってきたと思います。そういう意味では「日本対アジア」として，これまで近代化の到達度を比較してきましたが，むしろ中国を媒介にしたアジアの内部の相互影響関係から「歴史的なアジアの秩序」を，単にそれぞれが閉鎖的であったのではなく，華夷秩序で相互にリンクしあ

っていたということを基礎に置いて考えますと，近代の問題もこれとの連続性で考えることが出来るのではないかと思っています。

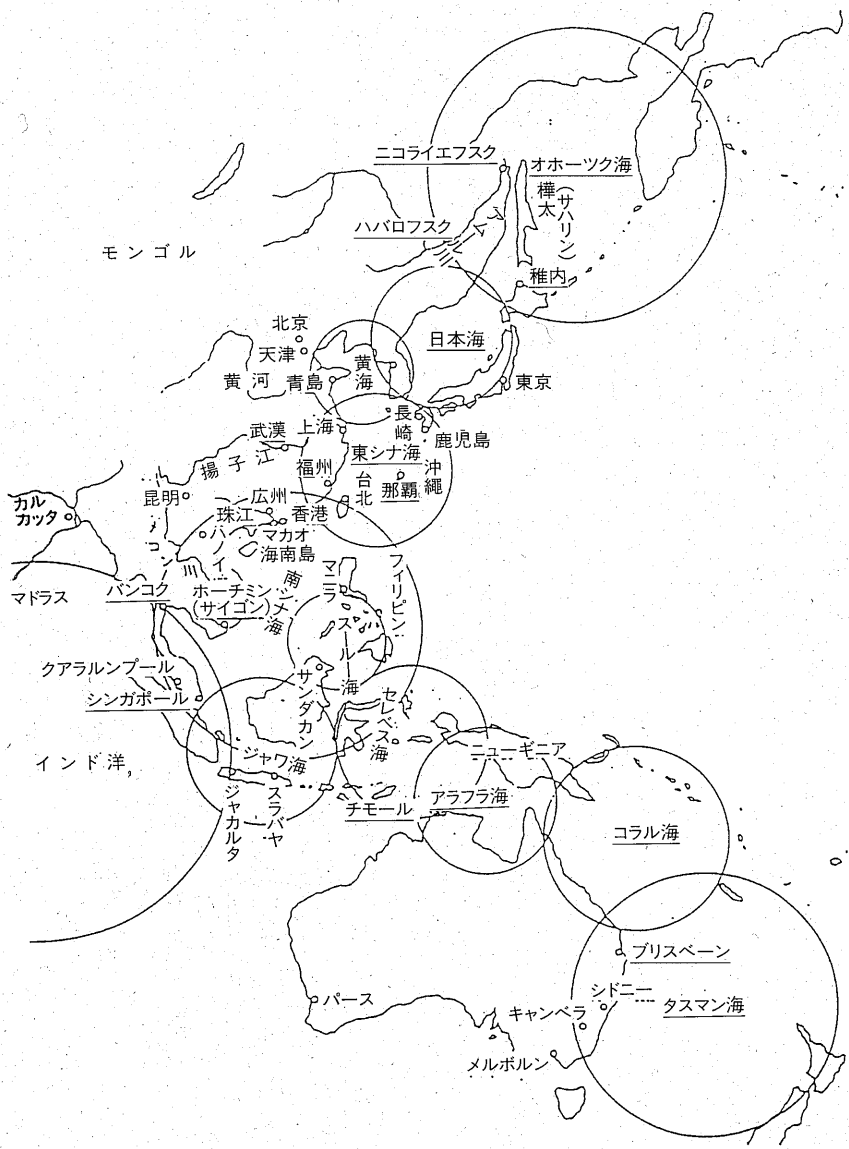
その意味で，これまで日本がヨーロッパをどのように理解しようとしたかということは，多く言われてきたわけですが，今回の展示会にありましたように，『俗語解』をはじめとする中国の方言，広東語などの辞書も作っていたことを考えますと，明治以降の日本は，国対国の関係では東京対北京という形で中国を見るようになりますが，歴史的にはこの南海路を通じて外側の情報を得ていたわけですから，そういう南からの歴史的な対外認識の回路を現在もう一度復活することを強く考えていいのではないかと思います。中国認識の場合でも，北京からの中国ではなく，華南や各省別のよりローカルな理解で中国あるいはアジアを考えること，そしてそのためには海域として相互に結び付けられた状況を思い起こすことが必要になると思われます。

このようにして，アジア域内秩序について一つの歴史的な連続性という視点を持ち，そこからアジアを考える時，日本海経済圏・黄海経済圏あるいは華南経済圏といわれるような経済圏の歴史的な根拠を考察する上で，東アジアの地域秩序を構成した海域圏の発想は今後ますます重要になってくると思います。

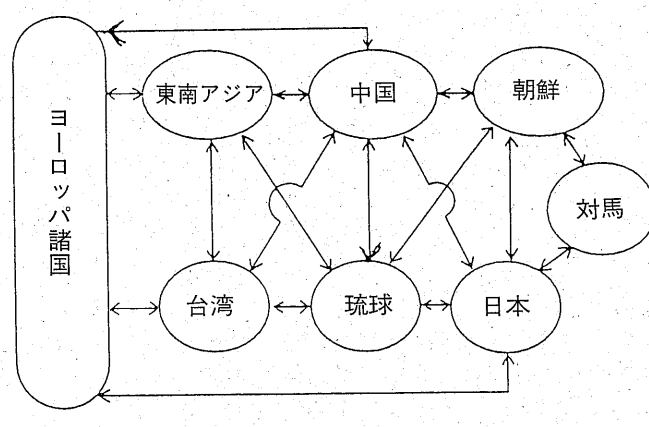
〈参考文献〉

・荒野泰典『近世日本と東アジア』 東京大学出版会，1988年
・籠谷直人「アジアからの〝衝撃〟と日本の近代」(『日本史研究』344号，1991年)
・加藤栄一「鎖国論の現段階」(『歴史評論』 1989年11月)
・小堀桂一郎『鎖国の思想—ケンペルの世界史的使命』(中公新書358) 1974年
・田代和生『近世日朝通交易史の研究』 創文社，1990年
・永積洋子『近世初期の外交』 創文社，1990年
・濱下武志「東アジア史に見る華夷秩序」(『国際交流』1993年11月)
・濱下武志『近代中国の国際的契機 朝貢貿易システムと近代アジア』 東京大学出版会，1990年
・古田和子「上海ネットワークの中の神戸」(『年報近代日本研究』14，山川出版社，1992年)
・溝口雄三［ほか］編『アジアから考える(2)地域システム，(3)周縁からの歴史，(5)長期社会変動』東京大学出版会，1994年
・三谷博「開国過程の再検討—外圧と主体性」(『年報・近代日本研究—近代日本研究の検討と課題』) 1988年
・ロナルド・トビ『近世日本の国家形成と外交』 創文社，1990年

(はました・たけし 東京大学東洋文化研究所教授)

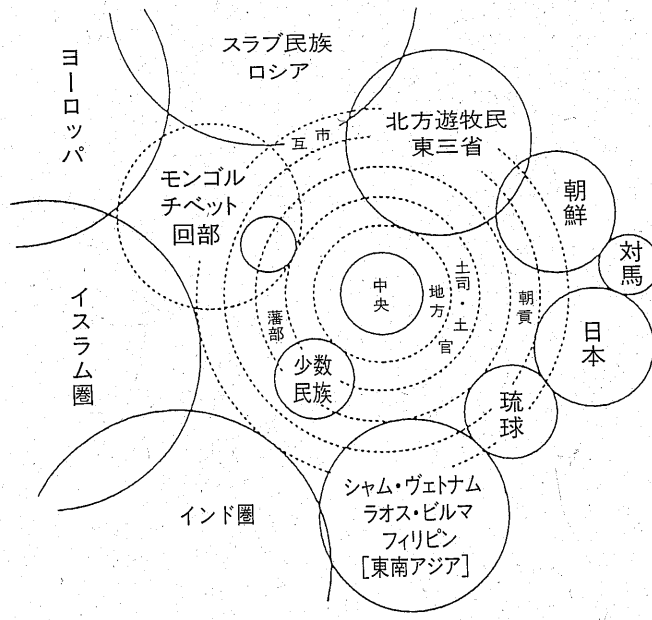


＜資料１＞　アジア海域圏図
出典：溝口雄三他編『アジアから考える(2) 地域システム』 p.8 （東京大学出版会　1993年）



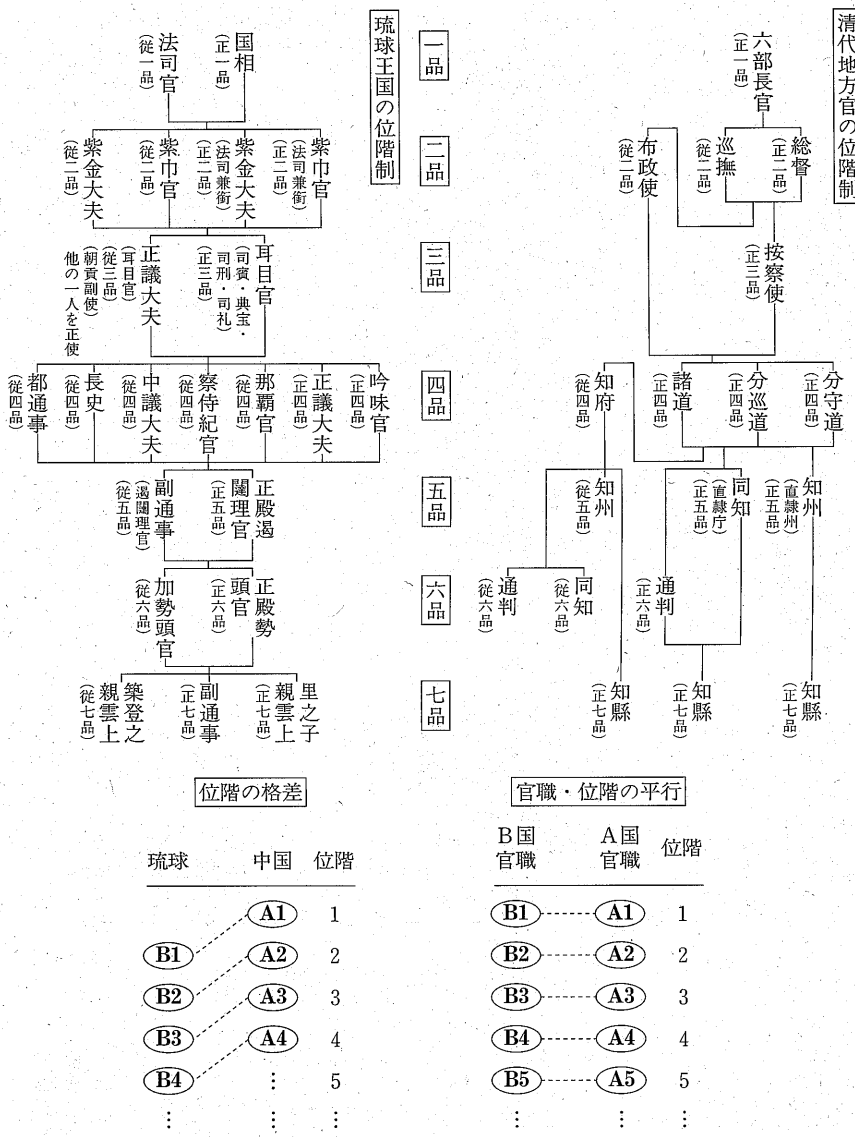
＜資料２＞　東南アジア地域をめぐる交易ネットワーク（17世紀―19世紀）

出典：濱下武志「東アジア史に見る華夷秩序」p. 35（『国際交流』No. 62；1993年11月）



＜資料３＞　中国と周辺関係（清代を中心として）

出典：濱下武志『近代中国の国際的契機―朝貢貿易システムと近代アジア―』p. 33（東京大学出版会　1990年）



＜資料４＞　清代地方官及び琉球王国の位階制とその格差・平行関係

出典：濱下武志「東アジア史に見る華夷秩序」p.32-33（『国際交流』No.62；1993年11月）

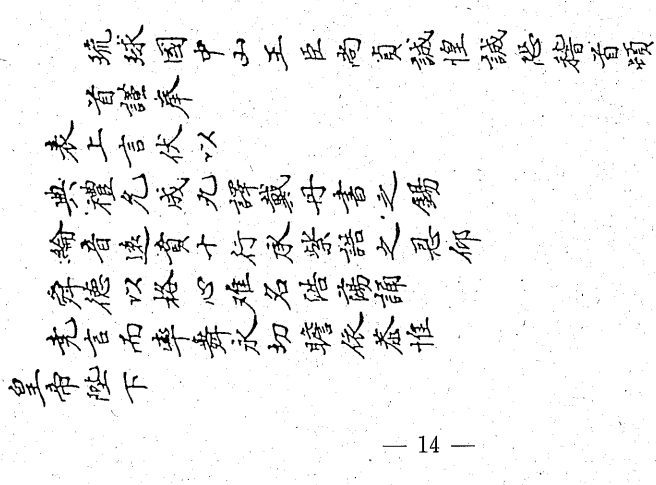
年号(西暦)	月・日	内容の要点(文書番号)
永楽三(一四〇五)	八・二六	皇帝(洪熙)より国王尚巴志に対し、皇考(永楽帝)の薨去を報ずる勅諭(〇一-〇四)
洪熙元(一四二五)	二・一一	皇帝即位の詔(〇一-〇四)
同年(〃)	二・一一	皇帝の、故国王思紹に対する諭祭文(〇一-〇四)
同年(〃)	二・一一	皇帝より、世子尚巴志の冊封の勅諭(〇一-〇五)
同年(〃)	二・一一	皇帝より、国王尚巴志および王妃に対する分賜品の目録(〇一-〇六)
同年(〃)	閏七・二七	国王尚巴志より、皇帝の即位を慶賀する表(二一-〇一)
同年(〃)	閏七・二七	国王尚巴志より、朝貢の帰途に玉紗を詐取された事件を訴える奏(二一-〇二)
同年(〃)	閏七・二七	国王尚巴志より、皮弁冠服の頒賜を請う奏(二一-〇三)
洪熙元(一四二五)	閏七・二七	国王尚巴志より、皇太子の立儲を慶賀する箋(二一-〇四)
同年(〃)	閏七・二七	国王尚巴志より、冊封と先王思紹の諭祭とを謝する箋(二一-〇五)
同年(〃)	閏七・二七	国王(尚巴志)より礼部あて、大行皇帝(洪熙帝)への進香、および冊封と先王の諭祭とを謝恩する咨(一六-〇二)
同年(〃)	閏七・二七	国王尚巴志より礼部あて、皮弁冠服の頒賜、宝紗詐取の事件、通事への冠帯給賜についての咨(一六-〇三)
同年(〃)	閏七・二七	国王尚巴志より礼部あて、宣徳帝登位の慶賀使派遣、海船の修理、附搭貨物の免税、大統暦の受領についての咨(一六-〇三)
同年(〃)	二・二七	国王尚巴志より礼部あて、進貢、附搭貨物の免税、大統暦受領についての咨(一六-〇四)
同年(〃)	三・二七	山南王他魯毎より、皇帝即位を慶賀する表(四三-〇一)
同年(〃)	三・二七	山南王他魯毎より礼部あて、朝賀使の派遣、海船の修理、附搭貨物の免税についての咨(四三-〇二)
同年(〃)	三・二七	山南王他魯毎より礼部あて、大行皇帝(洪熙帝)への進香の使者派遣の咨(四三-〇三)
同年(〃)	□・□	国王(尚巴志)より暹羅国あて、磁器・蘇木等の自由な貿易を要請する咨(四一-〇一)
同年(〃)	□・□	国王(尚巴志)より暹羅国あて、礼物を奉献し、中国への進貢品の収買を請う咨(四一-〇二)
宣徳元(一四二六)	三・□(二カ)	国王(尚巴志)の、進貢に当って遭風のため遅延した故に再発行する符文(三三-〇一)
同年(〃)	三・二	国王(尚巴志)の、進貢に当って遭風のため遅延した故に再発行する執照(一六-〇一)
同年(〃)	六・一	皇帝より、国王尚巴志に対し、皮弁冠服の給賜、および生漆・磨刀石を収買せしめる旨の勅諭(〇一-〇七)
洪熙二(一四二六)	九・一〇	国王尚巴志より礼部あて、長至令節の慶賀使派遣、附搭蘇木に対する給使者派遣の咨(四一-〇三)
宣徳元(一四二六)	□・□	価宝紗、大統暦の受領についての咨(一六-〇五)

<資料5の1>　歴代宝案（第一集）年時順文書目録

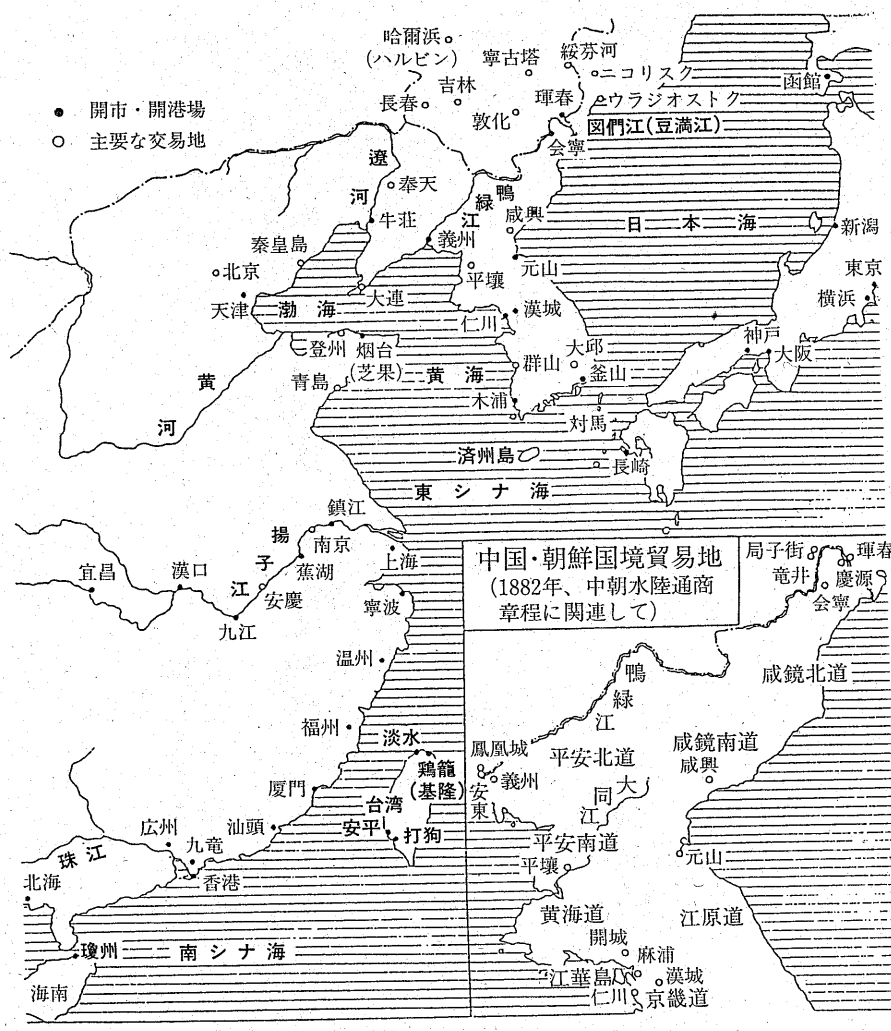
出典：『歴代宝案』第2冊（和田久徳編）p.649-650（沖縄県立図書館史料編集室　1992年）

<資料5の2>歴代法案表文（部分）

沖縄県立図書館所蔵版



＜資料６＞　媽祖の図
出典：林祖良編撰『媽祖』p. 36-37（福建教育出版社．1989年）



＜資料７＞　東アジアの開市・開港場図（1880年代を中心として）

出典：溝口雄三他編『アジアから考える(3)　周縁からの研究』p. 283（東京大学出版会．1993年）